

友人関係における親密性と排他性

— 排他性に関連する問題を中心にして —

三 島 浩 路¹⁾

目 的

幼稚園児から小学生を対象にした調査の結果から、仲間から排斥される傾向が低い子どもに比べて高い子どもの方が、孤独感による不安と抑鬱傾向との関連が強いことを、Gazelle & Ladd (2003) が報告しているように、友人関係は子どもの心に大きな影響を与える。しかし、友人関係が特に大きな影響を与えるのは、青年期・前青年期ではないだろうか。Durkin (1995) は、青年期に友人をもつことや、友人と共に活動することの重要性を指摘している。Petersen, Compas, Brooks-Gunn, Stemmler, & Grant (1993) は、青年期における友人関係の乏しさと抑鬱傾向との関連を指摘している。Garnefski & Diekstra (1996) は、高校生を対象にした研究から、親友がいない者ほど、問題行動や情緒的な問題をもちやすいことを示唆している。さらに、「子どもが青年期へと移っていくにつれて、次第に仲間からの社会的受容が彼らの全体的な自尊心にとって重要なものになっていく」とポーブ・ミッキヘイル・クレイグヘッド (1992) が述べているように、青年期、及び前青年期においては、共に活動し、受け入れ合えるような親密な友人関係をもつことができるかどうかは重要な問題である。しかし、適度な心理的距離を置いた親密な関係が、青年期になっても十分に成立していないという指摘 (長沼・落合, 1998; 藤井, 2001) もあり、親密な友人関係をつくり、つくり上げた関係を維持していくことは容易なことではない。

「ペア・セラピィ どうしたらよい友だち関係がつけられるか」という本の中で、セルマン・シュルツ (1996) は、「信頼が友情のすべてだ。私的なことについて本当はどんなふうに感じているのか、お互いには他の誰にも言わないことを話す。親密な友だちをつくるには長い時間がかかる。だからもし友だちがないしよで他の親密な

友だちをつくろうとしているのがわかったら、本当にいやになるよ」という12歳の少年の言葉を紹介している。

この少年の言葉に表されているように、親密な関係にある友人が、他に新たな友人をつくることに対する嫌悪感が背景となって、友人と独占的に関わろうとする行動がみられることがある。

本研究では、友人関係における親密性と、友人と独占的に関わろうとする排他的な行動との関連を検討すると同時に、排他性に関連していると考えられる問題について言及し、そうした問題と排他性との関連を合わせて考察する。

友人関係の変化

河合 (1985) は、「(小学校) 高学年になると、友人関係に新しい質的転換が起こります。すなわち、特定の仲良しの友だちを求めようになり、集団の再構造化が進行していきます。彼らはルーズで大きな集団で行動するよりも、少人数の仲良しの友だちと強く結びついて行動を共にすることを好むようになります。」と述べ、小学3・4年生を境目にして児童の友人関係に質的な変化がみられることを指摘している。また、井上 (1992) は、「女子にあっては小学校の高学年ごろから、男子ではややおそく、学級のソシオメトリック構造が小集団分化の状態を示すことが多い」と述べている。さらに、井森 (1997) は、「ソシオメトリックテストによる研究では、小学校3、4年生以降、小集団や相互選択に変動が少なくなる」と述べている。これらの指摘から、児童の友人関係は、小学校低学年から高学年にかけ、成員の流動性が大きく、成員相互の結び付きが弱いインフォーマル集団から、成員の流動性が小さく、成員相互の結び付きが強いインフォーマル集団へと変容していくことが予想できる。

小学4～6年生児童 (773名) が、周囲の人たちとどのようなつきあい方をしているのかを調べた結果 (「小学生ナウ」(1984)) によれば、「いちばん仲のよいともだち」に対して、「心の中は何でも話すような深いつき

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程)

あい」と約60%の児童が回答した。一方、「クラスのふつうのともだち」に対して、「心の中は何でも話すような深いつきあい」と回答した児童は10%にも満たなかった。逆に「クラスのふつうのともだち」に対するつきあい方で一番多かったのは、「あまり心の中まで話さないまあまあのつきあい」（約60%）であり、こうした傾向は男子に比べて女子の方が顕著であった。

この調査に回答した児童が「いちばん仲のよいともだち」として想定した相手は、自分が所属するインフォーマル集団の仲間であり、「クラスのふつうのともだち」として想定した相手は、自分が所属するインフォーマル集団以外の児童であるとするなら、相手が自分の所属するインフォーマル集団の仲間であるかどうかによって、児童は異なった接し方をしていることが想像できる。

こうしたことから、我が国においては、小学3～4年生以降、学級内で友人関係の固定化が進み、友人と友人以外の者に対する接し方に変化がみられると考えられる。

親密な友人関係

ところで、親密性や排他性という側面から友人関係を考えようとした場合、そうした特性がこれまでどのようにとらえられてきたのかを検討する必要がある。

友人関係の親密性をとらえるためにいくつかの方法が用いられてきた。「顔や名前を知っている程度の同性の友だち」（親密性レベル1）から、「最も親しい同性の友だち」（親密性レベル4）までの4段階に友人関係を分類する方法（山中, 1994）や、「親友もしくはそれに近いと思われる同性同年代の友人」（関係の親密さ High 条件）と、「あまり好意をもっていない同性同年代の知人」（関係の親密さ Low 条件）とに2分する方法（高木, 1992）、さらには、「親友」「友だち」「顔見知り」などと3群に分類する方法（下斗米, 2000；相澤, 2003）がある。また、2者の関係の親密さイメージを測定する方法として、二つの円が完全に交わっている段階から完全に分離している段階までの5段階の図を提示し、二つの円の一方を自分、他方を相手として、2者の関係のイメージに最も近いものを選択させる方法（諸井, 1989）もある。このように、友人関係の親密さを被調査者の主観を頼りにしてとらえた場合、その定義は必ずしも明確ではない。

それでは、親密な友人関係とは、どのような特徴をもった関係だろうか。Ando (1978) は、対人関係における親密化の過程と自己開示との関係を検討している。今川 (1989) は、自己開示の程度によって関係の親密さがとらえられることを示唆している。Chaikin & Derlega (1974) は、内面的な自己開示を行うことと関係の親密

さの関連を実験的な方法で検討した結果、内面に関する自己開示が、初対面の相手になされるよりも、親密な関係にある相手に対してなされる方がより適切とみなされるとしている。遠矢 (1996) は、「親密な友人関係は、適切な状況でふさわしいレベルの自己開示を相互に行ないながら時間をかけて築かれたものといえる」と述べており、親密な友人との間では、よい深い自己開示がなされていると考えられる。

(1) 親密性と排他性

親密性について、Berscheid, Snyder, & Omoto (1989) は、2人だけで過ごす時間の長さ、関係の強さ、2人だけで行う行動の種類といった3つの特性でとらえている。「2人だけで過ごす時間」「2人だけで行う行動」は、親密な関係を表す行動であると同時に、第三者に対する排他的な行動と理解することもでき、親密な関係の特徴の一つとして、その関係に属さない者に対する排他性が考えられる。排他性について増田 (1994) は、恋愛関係にある1組の男女を2者集団としてとらえ、2者集団の排他性と恋愛関係にある2者集団の発達過程との関係について検討している。この研究の中で増田は、最も親密な関係である恋愛関係でしか行わない行為を、最も排他性の高い行為とし、最も親密性の低い顔見知り程度の関係でも行う行為を、最も排他性の低い行為としており、排他性と親密性との直線的な関係を仮定している。

榎本 (2000) は、中学生から大学生を対象に質問紙調査を行い、「友人と一緒にいたい」という親和欲求と、友人以外の者を入れない閉鎖的な活動との間には正の関連がみられたことを報告している。小学校高学年の年齢に相当する友人関係について、ダック (1995) は、「この年齢の子どもは、友情を、独占的で排他的な関係とみなすこと、つまり、“親友”は、他に友人をもつことができず、ずっと親友のままいる排他的な関係だとみなしている」と述べており、親密な友人関係は、その関係に属さない者に対して排他的であるという特徴をもっている。

(2) 親密性・排他性の性差

男子は仲間集団内での関わりが多いのに対して、女子は2者間での関わりが多いことが指摘されている (Waldrop & Halverson, 1975; Benenson, 1990)。Benenson, Apostoleris, & Parnass (1997) は、4歳児と6歳児を対象にした調査の結果から、こうした違いが5歳以降にみられる可能性があるとしている。また、Bigelow (1977) は、男子に比べて女子の友人関係がより親密になるのは6歳以前からであることを指摘して

いる。こうしたことから、小学生の段階において、男女の友人関係のあり方にちがいがあることが予想できる。

Hays (1985) は、大学生を対象に行った調査の結果から、同性の友人関係を進展させるものとして、男性の場合には、活動を共有することが重要であるのに対して、女性の場合には、自分自身について言語的なコミュニケーションを行うことが重要であると述べている。友人関係のこうした男女間のちがいについて榎本 (1999) は、男子は活動を共有することが中心であるのに対して、女子は親密な関係をつくるのが中心であり、男女は異なった交友活動を形成していると述べている。Feshbach & Sones (1971) は、青年期の同性の2人からなる集団 (友人同士) にグループ討議を行わせ、一つの結論を導き出させる課題を行わせた。この課題を行わせた後、その集団に新たな1人 (新入者) を加えて3人集団とし、2人集団で行ったのと同様のグループ討議を行わせた。こうした活動を行った後、新入者に対する印象評定を行ったところ、男性に比べて女性の方がネガティブな評価を行っていた。また、活動中の様子から、女性の新入者の方が男性の新入者に比べ、会話に加わるまでの時間が長かったり、女性の集団の方が新入者のアイデアを結論に取り入れることが少なかったりした。こうした結果を踏まえ、Feshbach & Sones (1971) は、女性の友人のペアの方が、男性のペアに比べて、同性の新入者に対して、よりネガティブで拒否的であると結論している。この論文の中で述べられている新入者へのネガティブな認知や新入者のアイデアを取り入れようとする態度は、排他性の現れと考えられる。Berndt (1982) は、青年前期を扱った研究の中で、男子に比べて女子の友人関係の方がより親密であり、より排他的であると指摘している。久保 (1993) は、大学生を対象に RCI (Relationship Closeness Inventory) 尺度 (Berscheid et al., 1989) を利用して関係の親密さを調査した。その結果、RCI 尺度を構成する3つの特性すべてにおいて、女性の方が男性に比べて高い値を示した。石田 (1998) は、大学生を対象に親密性の程度を示す4つの行動に関する調査を行った結果から、女性は男性に比べてこうした行動をより多く行っており、女性の方がより親密な友人関係を形成していると述べている。

小学校入学のころからみられた友人関係の男女間のちがいは、青年期には、はっきりとしたものとなる。それでは、児童期から青年期に入るまでの間、友人関係の親密性や排他性に、男女間ではどのようなちがいがみられるのだろうか。

小学生の友人関係について Durkin (1995) は、男子

に比べて女子の方が、より小さな集団を形成し、より排他的で新しい仲間を受け入れようとしないと述べている。Jenkins, Goodness, & Buhrmester (2002) は、12歳の子どもを対象に質問紙調査を行い、男子に比べて女子の方が、同性の親友に対してより親密な支援を行っていることを示唆する結果を得た。Feldman & Dodge (1987) は、小学生の仲間関係にみられる44の問題状況場面の中で、仲間入りに関する問題が男子に比べて女子に多く発生している可能性があることから、友だち関係の境目は、男子に比べて女子の方がより明確であると述べている。Eder & Hallinan (1978) は、小学5・6年生の児童を対象に友人関係の調査を行い、バランス理論 (Heider, 1958) の考え方をもとに友人関係を分類した結果から、男子に比べて女子の友人関係の方がより排他的であると述べている。Buhrmester & Furman (1986) は、小学2・5年生と中学2年生を対象に、自分の考えや気持ちを伝えるなどといった指標をもとに親密さを調査した。その結果、小学2年生では、同性の友人に対する親密さに男女間で大きな違いはみられなかったが、小学5年生や中学2年生では、男子に比べて女子の方が、同性の友人により高い親密さを示した。さらに、吉田・荒田 (1997) は、小学4・5年生を対象に友人関係についての調査を行い、男子に比べて女子の方が、仲の良い友だちとばかり話をする傾向が強いという結果や、友だちに対する同調傾向が強いことを示唆する結果を得ている。

こうしたことから、小学校高学年の段階では、男子に比べて女子の友人関係の方がより排他的であり、より親密であると考えられる。

排他性が関連していると考えられる問題

(1) 固定化したインフォーマル集団と排他性

山中 (1994) は、大学生を対象に行った調査の結果から、女性の場合、出会ってから2週間のうちにあらゆる領域の行動を対象人物と行うことが同性の対人関係を親密にさせるために重要となるのに対して、男性の場合には、出会ってから1から2週間目の1週間に活動や経験を共有することが重要であると述べている。また、Wheeler & Nezlek (1977) は、新しい環境の中で、男性に比べて女性はより活発な相互作用を行い、友人関係の進行がより早いことを指摘している。

男子に比べて女子の友人関係の方が排他的であるために、一度できあがったインフォーマル集団の中に新しく入ることは難しい。その上、学年はじめの時期など、環境が変化した際には、女子の方がより早期の段階で活発な相互作用を行い、より早期に友人関係が進行すると考

えられる。そのため、固定的な友人関係は、女子の方がより早く成立する可能性が高い。

さらに、インフォーマル集団に入る機会を逸してしまったり、あるいは、インフォーマル集団から排除されてしまったりした場合、男子に比べて女子のインフォーマル集団の排他性が高いことから、どこかのインフォーマル集団に入ることは、男子に比べ女子にとってはより困難なこととなる可能性が高い。そのため、たとえ、あるインフォーマル集団に所属していたとしても、集団の仲間から自分が排斥されないように、男子以上に女子は友人関係に気を配らざるおえない。本間（2000）は、欠席促進理由や登校理由などを中学生を対象に調査した結果から、男子に比べて女子の方が、学校内の対人関係に強い関心をもち、その影響を受けやすいと述べている。保坂（1993）は、「（女子高校の）生徒は、自分の属しているグループからはみ出ないように並々ならぬ努力をしている」と女子校におけるカウンセラーとしての経験から述べている。女子高校生のつくるグループについて、女子高校生自身がどのように思っているのかを天野（1975）は調査し、「あまりいいものではないが、やむを得ないと思っている」と、多くの女子高生が思っていることを指摘している。以上のような指摘は、女子のこうした状況を裏付けるものである。

さらに、佐藤（1995）は、（女子高校生がつくる）固定的な友人関係に亀裂が生じたときには、不登校をも含めた教育相談場面での問題になることがあると指摘している。

(2) 親密性・排他性が他の児童・生徒の友人選択に与える影響（ピリヤード現象）

学級内の多くの児童・生徒が、高親密性・高排他性という特徴をもったインフォーマル集団に所属するようになることが、インフォーマル集団に所属していない児童・生徒の友人選択に間接的に強い影響を与える可能性がある。学級内で起きる可能性があるこうした現象を「ピリヤード現象」とし、探索的なものではあるが、そうした現象が起きるメカニズムをまとめた。

たとえば10人の子ども（記号a～j）がいる教室で、aとbとcは趣味が一致するというで一つのインフォーマル集団を形成した。fとgとhとiとjはバスケットボールのチームを自分たちでつくり、練習をする中で堅い友情の絆をつくった。こうしてdとeの2人が残った。

ある日、このクラスの担任が、「遠足のグループを決めるから、好きな子同士で集まりなさい」と指示した。すると、a b cの3人、f g h i jの5人はすぐに集まっ

た。そして、dとeも仕方なく2人で一つのグループをつくった。

dはeに魅力を感じているわけではないし、eがdに魅力を感じているわけでもない。

ところで、dもeも一人でいることがこれまで多かった。そんな2人が遠足に向けて共に活動するようになった結果、この2人を取り囲む周りの者が、「dとeは友だち」とみなすようになった。同時に、共に活動する中で、dやeも自分たちは仲間なのだと感じるようになった。

「自分たちは仲間なんだ」とdやeが感じるには理由がある。仮に、dやeが前述した遠足のグループづくりの場面で、2人グループをつくらなければどうなただろうか。dとeが一人一人であるために、「この方法だどどのグループにも入れない独りぼっちの子ができてしまうので、別の方法で遠足のグループを決める」と担任が言い出す可能性がある。このようなことを担任が言えば、dとe以外の子どもたちは当然不満を感じる。そして、dとeを不満のはけ口にする可能性が高い。その結果、dとeは不愉快な経験をするようになる。

ところで、こうしたグループづくりは年に1度や2度行われるものではない。掃除の役割分担を行う場面や給食の配膳係を決める場面などで、繰り返し何度も行われる。そのため、その都度その都度、dとeが別々にいれば、2人に向ける周りの子どもたちの対応は厳しくなる。しかし、dとeが2人グループをとりあえずつくれば、周りの子どもたちからのこうした厳しい対応に2人がさらされることはない。

つまり、dとeが2人で一つのグループをつくれれば、dとeに対して周りの子どもたちがネガティブな対応をとらなくなり、学習理論的（オペラント条件づけ）に考えれば、2人でグループをつくるというdとeの行動が強化されることになる。しかし、dとe本人にとってみれば、このようなメカニズムは分からない。そのため、dにとっては、「eと同じグループになると（本当は：周りの子の対応が変化したために）気分がいい」となり、eにとっても、「dと同じグループになると（本当は：周りの子の対応が変化したために）気分がいい」ということになる。dとeの原因帰属という点からこの出来事をみれば、「2人でグループをつくれれば気分がいい」ということになり、いつしか2人は、友人同士のように行動するようになる。

こうしたメカニズムによってつくられた友人関係すべてに問題があるとは考えられず、良好な友人関係を発展させるものもあろう。しかし、当人同士には、選択の余地がほとんどないという条件の厳しさを考えれば、この

ようなメカニズムによってつくられた友人関係に問題が生じる可能性が高いのではないだろうか。

「ビリヤード現象」に関しては、まったく探索的なものである。今後、こうした現象が実際にみられるのかどうかを検証する実証的な研究を進める必要がある。さらに、こうした研究を進める中で、このようなメカニズムによってつくられた友人関係に問題が生じる可能性が高いのかどうかを合わせて検討していく必要がある。

(3) 排他性といじめ

親密な関係の中にも、敵意・欺瞞・反目に特徴づけられる関係があることをウィーマン・ジャイルズ (1994) が示唆している。「深刻ないじめのケースでも、いじめっ子といじめられっ子は遊び仲間であることが少なくない。いじめられ、いためつけられても、いじめっ子たちと遊ぶことを求めていくのは、一つには仲間から孤立し、切り捨てられることへのおそれがあるからである」と森田・清永 (1994) は述べ、親しい友人間にも「いじめ」が存在する可能性があることを示唆している。

竹川 (1993) は、小学6年生と中学2年生を対象に行った「いじめ」と友人関係に関する調査の結果をもとに、「いじめのある学級においては、サブグループ化してまとまりやすい少数の者に親密な友人を限定する傾向があるといえ、学級集団内の友人の結合状態は、サブグループ内で緊密化し、サブグループ間で相互排他的となっていると考えられる」と述べ、「いじめ」のない学級に比べて、「いじめ」のある学級では、児童の友人関係が、友人間ではより親密であり、友人ではない者同士の間ではより排他的であることを示唆しており、親しい友人間にみられる「いじめ」に関しても、親密性や排他性が関連している可能性がある。

菅野 (1996) は、「いじめの背景」として、子どもたちの言葉や振る舞いの“すさみ”をあげ、女子の“すさみ”に対する指導に、教師が難しさを感じるが多いことや、「小さなグループを形成し、密接で閉鎖的な関係を築く」ことが、女子の「いじめ」の背景にあることを示唆している。松原 (1997) は、大学生など約300名を対象に、小学校から高校までの「いじめ体験」を回想させ、自分をいじめた相手との関係について調査し、小学生時代に受けたいじめについては、男子の場合、仲が悪い相手からのいじめ (19件) が、仲が良い相手からのいじめ (10件) に比べて多いのに対して、女子の場合には逆に、仲が良い相手からのいじめ (57件) の方が、仲が悪い相手からのいじめ (30件) よりも多いという結果を得た。松原 (1997) の調査結果は、小学生に関しては、親しい友人間にみられる「いじめ」は男子に比べて女子

に多いということを示唆している。さらに、森田・滝・秦・星野・岩井 (1999) は、全国の小学5年生から中学3年生までの児童・生徒約7,000名を対象に、いじめに関する大規模な調査を行った結果から、「いじめ」を行った相手が、よく遊ぶ友だちであるケースは、男子に比べて女子に多く、「女子では、いじめの半数以上が親しい友だちの間で発生している」と述べている。森田ら (1999) の調査結果も、親しい友人間にみられる「いじめ」は、男子に比べて女子に多く発生していることを示唆している。多数の児童・生徒等を対象に行ったインタビューの結果をもとに、シモンズ (2003) は、女子のいじめが結束のかたい仲よしグループの内部で起こりやすいと述べている。

以上のことから、「いじめ」全般の発生数に性差がみられるのかどうかについては言及できないが、親しい友人間にみられる「いじめ」に関しては、男子に比べて女子に多く発生している可能性がある。

親しい友人間にみられる「いじめ」に関する関心が高まり、そうした「いじめ」の形態に関する研究も行われるようになった (松尾, 2002)。高石 (1988) は、女子の「いじめ」は集団的であり、かつ、間接的な方法で攻撃が表出されやすいと述べている。さらに、男子に比べて女子の方が、より親密な友人関係をつくることや、より小さな集団の友人関係をつくるのが、女子の「いじめ」の特徴と関連していることを高石 (1988) は指摘している。Crick & Grotpeter (1995) は、視線をそらす、排除するなどといった方法で相手を脅す「関係を利用した攻撃」について言及している。Crick, Bigbee, & Howes (1996) は、9歳から12歳の児童を対象にした調査の結果から、怒りを示す行動として、暴力的な攻撃をあげたのは女子に比べて男子の方が多かったのに対して、「関係を利用した攻撃」は、男子に比べて女子の方が多かったことを報告している。三島 (2003) は、現職教師5人を対象にPAC分析と呼ばれる構造化された面接を行い、男女小学生にみられる「いじめ」の特徴について検討した。その結果から、女子の「いじめ」の特徴について「ひそひそ話をする・くつを隠す・かげ口を言う・悪口を書いた紙を回すといった行為は、『いじめ』に関わっている当事者以外には分かりにくく、こうした陰湿な行為を特徴としている。また、『3人グループ』『グループ内でのいじめも多い』ということも女子の『いじめ』の特徴としてあがっていることから、無視する・仲間はずれにするという行為は、少人数の仲よし集団内で行われている可能性が高い」と述べている。

女子に多くみられる「いじめ」の形態である「関係を利用した攻撃」は、親しい友人間にみられる「いじめ」

の形態と考えられる。このようないじめを親しい友人から受け続けても、既存のインフォーマル集団に留まり続ける背景には、インフォーマル集団がもつ排他性の高さが影響している可能性がある。親しい友人からいじめられ、自分が所属しているインフォーマル集団を出て、他のインフォーマル集団に入ろうとしても、インフォーマル集団の排他性が高い場合には、他のインフォーマル集団に簡単に入ることができない。男子に比べて女子のインフォーマル集団の排他性が高いことから、既存のインフォーマル集団から出ることにより、学級内で孤立してしまう可能性は、女子の方が高いと考えられる。そのため、親しい友人からいじめられても、既存の集団に留まろうとする傾向は、男子に比べて女子の方が強くなり、こうした違いが男女間にみられる「いじめ」の形態の違いを生じさせる原因の一つになっている可能性がある。

Whitesell & Harter (1996) は、親しい者からいじめられた場合の方が、そうではない者からいじめられた場合に比べてダメージが大きいことを指摘しており、親しい友人間にみられる「いじめ」は、女子にとってより深刻な問題といえよう。

引用文献

- 相澤寛史 2003 同性友人関係における投資モデルの精緻化 実験社会心理学研究, 42, 131-145.
- 天野隆雄 1975 女子生徒の心理とその教育 早稲田大学出版部
- Ando, K. 1978 Self-disclosure in the acquaintance process: Effects of affiliative tendency and sensitivity to rejection. *Japanese Psychological Research*, 20, 194-199.
- Benenson, J. F. 1990 Gender differences in social networks. *Journal of Early Adolescence*, 10, 472-495.
- Benenson, J. F., Apostoleris, N. H., & Parnass, J. 1997 Age and sex differences in dyadic and group interaction. *Developmental Psychology*, 33, 538-543.
- Berndt, T. J. 1982 The features and effects of friendship in early adolescence. *Child Development*, 53, 1447-1460.
- Berscheid, E., Snyder, M., & Omoto, A. M. 1989 The relationship closeness inventory: Assessing the closeness of interpersonal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 792-807.
- Bigelow, B. J. 1977 Children's friendship expectations: A cognitive-developmental study. *Child Development*, 48, 246-253.
- Buhrmester, D., & Furman, W. 1986 The changing functions of friends in childhood: A neo-Sullivanian perspective. In V. J. Derlega, & B. A. Winstead (Eds.), *Friendship and social interaction*. Pp. 41-62. New York: Springer-Verlag.
- Chaikin, A. L., & Derlega, V. J. 1974 Variables affecting the appropriateness of self-disclosure. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 588-593.
- Crick, N. R., Bigbee, M. A., & Howes, C. 1996 Gender differences in children's normative beliefs about aggression: How do I hurt thee? Let me count the ways. *Child Development*, 67, 1003-1014.
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. 1995 Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, 66, 710-722.
- ダック S. 仁平義明 (監訳) 1995 フレンズ — スキル社会の人間関係学 — 福村出版 (Duck, S. 1991 *Friends, for life: The psychology of personal relationships*. Harvester Wheatsheaf.)
- Durkin, K. 1995 *Developmental social psychology: From infancy to old age*. Blackwell Publishers Inc.
- Eder, D., & Hallinan, M. T. 1978 Sex differences in children's friendships. *American Sociological Review*, 43, 237-250.
- 榎本淳子 1999 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化 教育心理学研究, 47, 180-190.
- 榎本淳子 2000 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究, 48, 444-453.
- Feldman, E., & Dodge, K. A. 1987 Social information processing and sociometric status: Sex, age, and situational effects. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 15, 211-227.
- Feshbach, N., & Sones, G. 1971 Sex differences in adolescent reactions toward newcomers. *Developmental Psychology*, 4, 381-386.
- 藤井恭子 2001 青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析 教育心理学研究, 49, 146-155.

- 福武書店 1984 友だち 小学生ノウ, 3-10.
- Garnefski, N., & Diekstra, R. F. W. 1996 Perceived social support from family, school, and peers: Relationship with emotional and behavioral problems among adolescents. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 35, 1657-1664.
- Gazelle, H., & Ladd, G. W. 2003 Anxious solitude and peer exclusion: A diathesis-stress model of internalizing trajectories in childhood. *Child Development*, 74, 257-278.
- Hays, R. B. 1985 A longitudinal study of friendship development. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 909-924.
- Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. New York: Wiley. (大橋正夫訳 1978 対人関係の心理学 誠信書房)
- 本間友巳 2000 中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析 教育心理学研究, 48, 32-41.
- 保坂一己 1993 中学・高校のスクール・カウンセラーの在り方について —私立女子校での経験を振り返って— 東京大学教育学部心理教育相談室紀要, 15, 65-76.
- 今川民雄 1989 対人関係の形成過程 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一(編) 社会心理学パースペクティブ1 —個人から他者へ— 誠信書房 Pp. 350-360.
- 井森澄江 1997 仲間関係と発達 井上健治・久保ゆかり(編) 子どもの社会的発達 東京大学出版会 Pp. 50-69.
- 井上健治 1992 人との関係の拡がり 木下芳子(編) 対人関係と社会性の発達(新・児童心理学講座8) 金子書房 Pp. 3-28.
- 石田靖彦 1998 友人関係の親密化に及ぼすシャイネスの影響と孤独感 社会心理学研究, 14, 43-52.
- Jenkins, S. R., Goodness, K., & Buhrmester, D. 2002 Gender differences in early adolescents' relationship qualities, self-efficacy, and depression symptoms. *Journal of Early Adolescence*, 22, 277-309.
- 河合芳文 1985 ソシオメトリー入門 みずうみ書房
- 久保真人 1993 行動特性からみた関係の親密さ —RCIの妥当性と限界— 実験社会心理学研究, 33, 1-10.
- 増田匡裕 1994 恋愛関係における排他性の研究 実験社会心理学研究, 34, 164-182.
- 松原達哉 1997 小中高校時の「いじめの実態とその対策に関する研究」 石橋湛山記念基金研究費助成費研究成果報告書
- 松尾直博 2002 学校における暴力・いじめ防止プログラムの動向 —学校・学級単位での取り組み— 教育心理学研究, 50, 487-499.
- 三島浩路 1997 対人関係能力の低下といじめ 名古屋大学教育学部紀要(心理学), 44, 3-9.
- 三島浩路 2003 小学校教師がイメージする男子・女子児童の「いじめ」 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), 50, 123-132.
- 森田洋司・清永賢二 1994 新訂版 いじめ —教室の病い— 金子書房
- 森田洋司・滝 充・秦 政春・星野周弘・岩井彌一 1999 日本のいじめ —予防・対応に生かすデータ集— 金子書房
- 諸井克英 1989 対人関係への衡平理論の適用(2) —同性親友との関係における衡平性と情動的状態— 実験社会心理学研究, 28, 131-141.
- 長沼恭子・落合良行 1998 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, 10, 35-47.
- Petersen, A. C., Compas, B. E., Brooks-Gunn, J., Stemmler, M., Ey, S., & Grant, K. E. 1993 Depression in adolescence. *American Psychologist*, 48, 155-168.
- ポープ A. W.・ミッキヘイル S. M.・クレイグヘット W. E. 高山巖(監訳) 1992 自尊心の発達と認知行動療法 —子どもの自信・自立・自主性をたかめる— 岩崎学術出版社 (Pope, A. W., McHale, S. M., & Craighead, W. E. 1988 *Self-esteem enhancement with children and adolescents*. Pergamon Press.)
- 佐藤有耕 1995 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析 神戸大学発達科学部研究紀要, 3, 11-20.
- 高木浩人 1992 自己開示行動に対する認知と対人魅力に関する研究 実験社会心理学研究, 32, 60-70.
- セルマン R. L.・シュルツ L. H. 大西文行(監訳) 1996 ペア・セラピー: どうしたらよい友だち関係がつかれるか I 巻 北大路書房 (Selman, R. L., & Schultz, L. H. 1990 *Making a friend in youth: Developmental theory and pair therapy*. The University of Chicago Press.)
- シモンズ R. 2003 女の子どうして、ややこし

- い！ 鈴木淑美（訳） 草思社（Simmons, R. 2002 *Odd Girl Out: The Hidden Culture of Aggression in Girls*. New York: Harcourt Inc.）
- 下斗米淳 2000 友人関係の親密化過程における満足・不満足感及び葛藤の顕在化に関する研究, *実験社会心理学研究*, **40**, 1-15.
- 菅野 純 1996 いじめ 子どもの心に近づく 丸善ブックス
- 高石浩一 1988 少年期の対人関係の問題について —特に「いじめ」との関連から— 京都大学教育学部紀要, **34**, 221-230.
- 竹川郁雄 1993 いじめと不登校の社会学 —集団状況と同一化意識— 法律文化社
- 遠矢幸子 1996 友人関係の特性と展開 大坊郁夫・奥田秀字（編）親密な対人関係の科学 誠信書房 Pp. 89-116
- Waldrop, M. F., & Halverson, C. F. 1975 Intensive and extensive peer behavior: Longitudinal and cross-sectional analyses. *Child Development*, **46**, 19-26.
- Wheeler, L., & Nezlek, J. 1977 Sex differences in social participation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 742-754.
- Whitesell, N. R., & Harter, S. 1996 The interpersonal context of emotion: Anger with close friends and classmates. *Child Development*, **67**, 1345-1359.
- ウィーマン J. M.・ジャイルズ W. 和田 実（訳） 1994 対人コミュニケーション ヒューストン M.・シュトレーベ W.・コドル J. P.・スティヴンソン G. M. 編 末永俊郎・安藤清志（監訳）社会心理学概論 —ヨーロッパ・パースペクティブ— 誠信書房 Pp. 261-294 (Hewstone, M., Stroebe, W., Codol, J. P., & Stephenson, G. M. (Eds.) 1988 *Introduction to social psychology: A european perspective*. Oxford: Basil Blackwell.)
- 山中一英 1994 対人関係の親密化過程における関係性の初期分化現象に関する検討 *実験社会心理学研究*, **34**, 105-115.
- 吉田寿夫・荒田則子 1997 とかく女の子は群れたがる —児童期における対人関係の性差に関する研究— 日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 298.

(2004年9月30日 受稿)

ABSTRACT

Intimacy and exclusivity in friendship:
Focusing on problematic issues of exclusivity

Kouji MISHIMA

This study reviewed existing research on friendship from infancy through adolescence, placing a particular focus on middle childhood stage, and discussed the relationship between intimacy and exclusivity, as well as problems caused by exclusivity. From the research review, it was revealed that females, more than males, enjoyed more intimate friendships, and were more exclusive, often expressing their intimacy through acts of exclusivity. Furthermore, it was likely that exclusivity was also responsible for the fixation of friendship groups within the class, and bullying in intimate cliques. In addition, this study probed into what effects the increase of highly intimate, highly exclusive informal groups has on children who do not belong to these groups, and called this phenomenon the “billiard phenomenon.”

Keyword: intimacy, exclusivity, friendship cliques, bullying, billiards phenomenon